

令和8年度 御殿場市議会 福祉文教委員会 行政視察報告書

1. 日程 令和8年7月6日（月）～令和8年7月8日（水）

2. 視察先及び視察事項

(1) 愛知県豊田市

○読書を起点とした子どもの探究力育成と地域連携の推進について

(2) 愛知県瀬戸市

○図書館・学校図書館と地域の連携協働による読書のまちづくり推進事業について

(3) 岐阜県郡上市

○地域コミュニティを基盤とした読書活動の推進と家庭・地域に根付く読書習慣の形成について

(4) 岐阜県岐阜市

○市民協働による読書活動の推進と家庭・地域に広がる読書文化の形成について

3. 参加者

委員長 高村芳章

副委員長 小林昌美

委員 辻川公子 小林恵美子 永井誠一

川上秀範 芹澤勝徳

当局 伊藤孝博（社会教育課長）

事務局 桐生守（議事課副参事）

4. 視察先対応者

(1) 愛知県豊田市

学校教育課 指導主事 田中 様 ほか

(2) 愛知県瀬戸市

市立図書館 館長 吉村 様 ほか

(3) 岐阜県郡上市

和良振興事務所 所長 池戸 様 ほか

(4) 岐阜県岐阜市

市立図書館 館長 長尾 様 ほか

5. 視察の内容

■読書を起点とした子どもの探究力育成と地域連携の推進 について

日時：令和8年7月6日（月） 午後2時～午後4時

場所：豊田市立朝日丘中学校

視察の目的

豊田市の取組を通じ、乳幼児期から学校教育、地域参加、多文化対応まで一体化した読書施策の全体像と運用手法を学び、本市における図書文化の醸成と子どもの主体的な学びの向上に資する施策立案に活かす。

視察先の概要

日本を代表するグローバル企業であるトヨタ自動車が本社を置く「クルマのまち」で製造品出荷額は全国1位。市域の約7割が森林で、自然豊かな山々や矢作川が美しい風景を形成し、稲作、野菜、果樹の栽培等も行われている。また、トヨタスタジアムはスポーツやイベントの拠点となっている。

人口：414,394人 議員定数：45人【R8.4.1時点】

令和8年度一般会計当初予算額：2,118億円

視察の内容

豊田市立朝日丘中学校（800名以上の生徒が在籍）メディアセンター（図書館）において、教育委員会及び地域交流課職員から、豊田市の子ども読書活動推進の取組について説明を受けるとともに、施設を視察した。

豊田市では、図書館、学校、地域が連携した推進体制を構築し、学校図書館を調べ学習や探究学習の拠点として活用している。朝日丘中学校では、メディアセンターを生徒の生活動線上に配置し、学習スペースや展示の工夫により日常的に本に親しめる環境を整備していた。また、「調べる・伝える学習コンクール」、ネットワーク館による図書サービス、電子図書館の運用、不読率調査を踏まえた取組などについて説明を受け、子どもの読書環境の充実に向けた施策を視察した。

考察

○全市、全庁的な推進体制の構築

豊田市では、「子ども読書活動推進計画」を教育行政計画に統合し、図書館のみならず、学校、子育て部門、地域関係者等が一体となって読書活動を推進している。推進組織によるワーキンググループを年3回開催し、事業評価や課題共有を行うことで、継続的な改善につなげている点が印象的であった。

豊田図書館協議会も年に3回ほど開催されており、大学の先生、小中高の校長、こども園園長、商工会、企業、福祉施設、市民公募のメンバーで構成されている。特に福祉関連のメンバーから障がい者目線での活発な意見や提案が出ているとのことである。本市も様々な立場や視点の方を協議会メンバーに入れたらと考える。

○学校図書館を活用した主体的な学び

学校図書館では、児童生徒が自ら資料を探し、司書に相談し、委員会活動や読書イベントの企画運営にも関わっている。また、学習の場としてだけでなく、安心して過ごせる「居場所」としての役割も担っていた。

本市では、御殿場中と原里中の校舎改修を行う計画がある。原里中は図書室面積が十分に確保されていると感じたが、御殿場中の設計図では今の図書室そのままとなっている。本市最大の生徒数の御殿場中にとって手狭ではないか。朝日丘中学校の図書室を拝見し、より本市の学校図書室の機能強化及び充実化は必須と考える。

○朝日丘中学校メディアセンターの先進的取組

メディアセンターを生徒の生活動線上に配置したことで利用率が向上し、学習スペースや展示スペースの充実により、日常的に図書に触れる環境が形成されていた。特に、見せる書架や特集展示など、生徒が本に興味を持つ工夫が随所に見られた。

○読書と探究学習の連携

「豊田市学校や地域の図書館を使った調べる・伝える学習コンクール」を継続的に開催し、令和6年度には4,520点の応募があった。読書活動を単なる読書にとどめず調査・研究・発表へと発展させる仕組みが構築されていることは大変参考になった。

○家庭や地域を巻き込んだ読書活動

毎月23日を「本を語ろうの日」と定め、家族で本を読み、感想を語り合う時間を推奨している。学校だけでなく、家庭や地域を含めた読書文化の醸成に取り組んでいる点は、本市においても参考とすべき取組である。ブックスタート、ブックスタートプラスだけでなくこのような取組をぜひとも取り入れ、家庭内での読書文化の醸成を図りたい。

○ネットワーク館の活用

市内の交流館やコミュニティセンターを「ネットワーク館」と位置付け、中央図書館と蔵書や物流システムを共有することで、「どこでも借りて、どこでも返せる」環境を実現していた。身近な地域に読書環境を整備することで、市民の利便性向上につながっている。本市も参考にしたい取組である。

○不読率への対応

財政力指数1.41とものすごい数値を持つ豊田市は、教育に関する取り組みも押さえるべきところをしっかりと押さえていると感じた。小学校5年生と中学校2年生を対象に毎年不読率の調査を実施し、把握と分析を行っている。不読率が全国平均より高い、全国学力学習状況調査において国語の特に読解力問題については正答率が低い、コロナ過を経て令和4年度から急激に不読率が上昇し、本を読む子供と読まない子どもの2極化が顕著に進んでいるなどの結果を踏まえ、「学校図書館活用の手引」の改訂や年間計画の作成など、学校全体での取組につなげている。

○電子図書館の導入と活用

豊田市では令和4年10月から電子図書館サービスを開始し、24時間365日、スマートフォンやタブレット等から利用可能な環境を整備している。児童書や実用書、学習コンテンツなど幅広い資料を提供し、紙の本と電子書籍を組み合わせた読書環境の充実を図っている。電子メディアの利用が増加する現代において、子どもたちの読書機会を確保する有効な手段であると感じた。

◎まとめ

豊田市では読書活動を単なる図書館事業としてではなく、「子どもの探究力育成」「家庭・地域との連携」「多様な学びの創出」を実現する教育施策として位置付け、全庁的に推進していることを学んだ。特に、学校図書館の活用、探究学習との連携、ネットワーク館の整備、電子図書館の導入などは、本市においても今後の図書館施策や読書活動推進の検討に当たり、大変参考となる先進的な取組であった。

本委員会の掲げる「読書のまち御殿場」の推進は本市の学力向上の一翼を担う重要なテーマであると考え、市へ対して、そして市民に対してしっかりと訴えられる提案を作成していきたい。



座学により
説明を受ける。



朝日丘中学校
メディアセンター
を視察

■図書館・学校図書館と地域の連携協働による読書の

まちづくり推進事業について

日時：令和8年7月7日（火） 午前9時30分～午前11時

場所：瀬戸市役所

視察の目的

街中にある「書店」を基盤とした読書活動の実態を調査することにより、活字文化の振興や書店のリノベーション支援など、行政の支援の在り方を把握し、本市施策に活かす。

視察先の概要

1000年以上の土と炎の歴史を有する陶磁器産地であり、今も多くの窯元や工房が集まり、日々新たな作品を生み出している。瀬戸焼は、日本遺産である日本六古窯のひとつで「せともの」は焼物の代名詞になっている。現在は、名古屋市のベッドタウンとしての側面も持つ。

人口：124,812人 議員定数：26人【R8.4.1時点】

令和8年度一般会計当初予算額：485億6,000万円

視察の内容

瀬戸市は文部科学省の補助事業採択（令和7年度実施）として「地元図書館と学校図書と地域連携」を行っている。教育部長・図書館長・書店代表・学校教育課・中学校長等による図書館協議会で行っている。

「商店街の活性化と図書の連携を目指す」をテーマに、地元書店が会場となり2か月に1回（第4土曜日・10名定員）で「大人の朗読会」を開催している。そして、「読書の祭典」として、①商店街でテーマ別の本棚を披露（ワークショップで作業）、②講演会、③ミニコンサート（演奏と朗読会）を実施し、除籍本を商店街で引き受け、1冊100円で販売し、講師費用に充当する「リサイクル市」も行っている。

「学校図書室の地域図書館としての活用」としては、学校図書室を地域開放し、土曜日・日曜日を地域図書館として活用し、市内学校8校で民間委託により実施している。

「学校図書館との連携」としては、読書活動支援として週1回司書を学校へ派遣したり、1週間後に注文した本が届く団体貸出も行ったりしている。

考察

「商店街の活性化と図書の連携を目指す」中で行われている地元書店での「大人の朗読会」や「読書の祭典」としての取組、「リサイクル市」は斬新であった。「読書のまち御殿場」を目指すのならこういった書店の協力は大切になると考える。

「学校図書室の地域図書館としての活用」での学校図書室の地域開放は、本市で行うのであればニーズを調査する必要がある。せっかく開いても地域住民が集まらなくては意味がない。前段としてまずは地域開放に耐えうる学校図書室にする必要がある。校舎改修の予定がある御殿場中・原里中に「図書サロン」を設け、校舎の動線の確保とセキュリティ対策を図り、地域図書館として活用することを考えたい。

「学校図書館との連携」は、司書の学校への派遣と団体貸出制度が参考になった。創設を検討してもらい、気楽に市立図書館の本の貸出ができるとありがたい。このように、学校図書室と市立図書館の連携強化をすることで、学校図書室の充実を図りたい。

また、図書館サポーターをボランティアで募っていることや、本の購入を図書館専門の書籍流通業者からではなく地元書店組合からの購入に変更したことで、余計な経費が削られ司書スキルが上がったとのことも参考になった。

市場相場が200～300円という装備費については、地元福祉施設と書店が連携し一冊80円で福祉団体が行っており、経費的にも安価となっている。これらの取組は本市でも参考になると感じた。

瀬戸市の全図書館は直営方式で行い、図書館と地域・学校がしっかり連携していた。本市も現指定管理終了後は直営方式も検討したい。



座学により説明を受ける。



瀬戸市議会議場にて

■地域コミュニティを基盤とした読書活動の推進と家庭・

地域に根付く読書習慣の形成について

日時：令和８年７月７日（火） 午後２時～午後４時

場所：和良町民センター（岐阜県郡上市）

視察の目的

公民館活動や地域コミュニティを基盤とした読書活動の実態を調査することにより、家庭や地域に読書習慣を根付かせる仕組みや継続的な運営方法、行政の支援の在り方を把握し、本市施策に活かす。

視察先の概要

豊かな自然と歴史が息づく観光地である。郡上八幡では、夏を彩る「郡上おどり」が全国的に有名であり、伝統の音頭と情緒あふれる町並みが訪れる者を魅了する。一級河川が２４本あり、山林の高い水源かん養能力により美しく豊かな水に恵まれている。食品サンプル発祥の地とされ、生産量は全国第１位である。

人口：３６，５１５人 議員定数：１８人【R8.4.1時点】

令和８年度一般会計当初予算額：２９２億４，４００万円

視察の内容

近年の市内図書施設の利用状況や施設の老朽化によって図書館機能の集約によりサービスの充実を図るという方針が示され、７施設を２施設に集約した。

和良町民センターは郡上市でも市内中心より車で４０分と辺境であるため公民館図書室として再出発を検討し、市民協働により公民館図書室を運営している。和良町（人口１３００人ほど）では和良図書館を愛する会（住民グループ会員２０名）がありボランティアで図書室を応援している。

郡上市としては、ブックスタートとして３～４才児検診にて絵本をプレゼントしている。そして、お膝抱っこでの読み聞かせを行い赤ちゃんから本に触れ合う文化を醸成している。さらに、小学校１７施設に月２回本を貸出しており児童から喜ばれているとのことであった。また、家読という言葉８３％の市民が知っているとの説明があった。

考察

郡上市和良町公民館図書室は、財政力指数0.33という厳しい財政状況の中で、図書機能を7施設から2施設へ集約するという決定を受け、地域の図書機能を維持するための苦肉の策として設置されたものであった。

本市では今月、新図書館「ほんてらす」が開館するが、今回の視察を通じて、施設整備というハード面だけでなく、地域における図書機能をどのように支えていくかというソフト面の重要性を再認識した。

特に、新図書館は市中心部から離れた場所に位置していることから、今後はサテライト機能をどのように充実させ、市民協働の視点を持って地域全体で図書サービスを支えていくかが重要な課題であると感じた。

和良町での和良図書館を愛する会のボランティアによる図書室の応援は、本市においても、移動図書館と併設し公民館等を利用し図書室として活用できるのではないかと感じた。

ブックスタートは本市でも行っている。お膝抱っこでの読み聞かせなど家庭内での読書活動は情操的にもたいへん効果的であるので取り入れていきたい。このことにより、「家読」という言葉をも多くの市民に知ってもらいたい。



座学により説明を受ける。



和良町民センター（旧図書館分館）を視察



出典：郡上市ホームページ

■市民協働による読書活動の推進と家庭・地域に広がる

読書文化の形成について

日時：令和8年7月8日（水） 午前9時～午前11時

場所：みんなの森 ぎふメディアコスモス（岐阜県岐阜市）

視察の目的

岐阜市の「みんなの森 ぎふメディアコスモス」を拠点にした市民活動や交流機能を融合させた施設運営等の先進的な取組について、施策の立案過程、市民参加の仕組み、事業の具体的内容及び成果を調査し、本市の施策に反映させる。

視察先の概要

古くから歴史と文化が息づく都市である。織田信長が天下統一を目指した岐阜城は、その象徴であり、美しい金華山の頂にそびえる。市内は長良川が流れ、夏には伝統の鵜飼が観光客を魅了する。戦後、日本有数のアパレル産地として発展し、現在の繊維・衣類等卸売業の販売額は全国上位である。

人口：396,258人 議員定数：38人【R8.4.1時点】

令和7年度一般会計当初予算額：2,006億8,000万円

視察の内容

みんなの森 ぎふメディアコスモス内にて座学後、館内を案内していただいた。

この施設は、「知の拠点」市立中央図書館、「絆の拠点」市民活動交流センター、多文化交流プラザ及び「文化の拠点」となる展示ギャラリー等からなる複合施設である。

2階部分が中央図書館となっていて、壁のない斬新なデザイン、図書館は屋根の付いた公園をコンセプトに「子どもの声は未来の声」をいう理念を大切にし、少しくらい賑やかでも泣いてしまっても微笑ましく親御さんたちと一緒に見守っているという姿勢である。開館から11年経過しているが、年間130万人の利用があるという、かなり市民から愛されている施設であることが伺えた。

また、図書館が市の観光課に位置していながら、学校図書館ともしっかり連携できていた。

考察

説明資料の冒頭に掲げられていた「みんなの森 ぎふメディアコスモスは屋根のついた公園です」という言葉、そして図書館長からの説明が、この施設の理念を端的に表していた。図書館を「本で人とまちをつなぐ屋根のついた公園」と位置づけたコンセプトは非常に明快であり、周辺整備を含めたブランディング戦略は、まちづくりと観光戦略の出口の一つとして機能していると感じた。

特に、未来を担う子どもたちを大切に育む事業への強いこだわりや、市民と一体となって施設を創り上げていく市民協働の視点は、本市にとっても大いに参考となるものであった。

「ほんてらす」は、ハード面では整備が進み、開館に向けた準備が整っている。一方で、ぎふメディアコスモスが「私たちが大切にしていること」として掲げていた「ここにいると気持ちがいい」「ずっとここにいたくなる」「何度でも来てみたくなる」といった、利用者の居心地や愛着を生み出すソフト面を、今後どのように構築していくかが大きな課題である。

今回の視察を通じ、図書館は本を読んだり借りたり返したりするだけの場所ではなく、小さなお子さんを連れてくる親御さんの情報交換の場であったり、中高生が勉強をする場であったり、いろいろなコミュニケーションが生まれたりする、まちの魅力を高める「地域の居場所」として機能することの重要性を改めて認識した。「ほんてらす」においても、市民が主体的に関わり、何度でも訪れたくなるような魅力あふれる図書館になることを期待する。市民参加のイベントや展示など、運営側の意気込みと創意工夫で盛り上げてほしいと思う。

このみんなの森 ぎふメディアコスモスも市長部局観光課の傘下である。オリジナルの書籍やグッズも販売されており、教育委員会ではなく観光課であることの優位性を感じた。



座学により説明を受ける。



みんなの森 ぎふメディアコスモスを視察